
無能

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能

【Zコード】

Z3811F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

砂漠を走る軍のトラック。父に命じられるまま戦地へやってきたウェインがその中にいた。この戦争の意味とは…戦地に赴いた瞬間から彼の運命は変わつていった…

周囲を見渡して見えるのは砂と星空のみ、闇が広がり幻想的な雰囲気を出す砂漠地帯を一台の軍用トラックが走っていた。それは敵の銃撃を受けてもロケット弾の類でなければ穴が開くことは無い特殊な金属に覆われており、その頑丈な体で荷台部分に乗る数名の兵士を守っていた。その中の兵士の一人、彼の名はウェイン・バーネット。

夜の砂漠は彼にそこが戦場であることを一時忘れさせるほど静かだった。しかし、自分と同じようにトラックに揺られている兵士達を見るとすぐに砂漠の魔力は消え、自分の居場所を思い出させた。兵士達はみな重々しく武装しているのだ。目の前には長銃を背負い座っている者もいた。

戦地へ来てからひと月が経つ。彼はひと月前、父親に呼び出されこう言われた。

「お前は出来損ないだ！私の恥。いいか！これから戦地へ行け！少しでも変わつて見せろ」

父の言葉は絶対である。彼は何も反論せず戦地へ赴いた。

-出来損ない - それはウェイン自身も感じていたことだった。威厳、決断力、強さ、父が持っているそれらの優れたモノをウェインは持っていない。それどころか、自分は父と正反対であり、言つてしまえば臆病者だと感じていた。事実、戦地へ就いてから数日間は底知れぬ恐怖を感じていた。

(いつ敵の襲撃が起きるのだろう？その瞬間がきたら人間を殺すのか？無事に国に帰れるのだろうか・・・)

だが、それらの恐怖は戦地での自分のポジションを理解したことだんだんと消えていった。

彼が配属された部隊は基地周辺での活動がほとんどで、周辺の見回り以外であることといえば、少し離れた基地へ物資の供給をするぐ

らいのことでの、現在も急ぎの物資を届け終え、基地へ戻る途中であった。彼が戦地に赴く前に想像していた爆発音が響き銃弾が飛び交うような光景はこの国のどこかで起こっているのだろう。けれども、この基地周辺で活動している限りそんな危険に遭遇することは、おそらく無いのだ。

「食べるか？ ウェイン」

隣の兵士がポケットからチョコレートバーの袋を取り出し、ウェインに話かけてきた。彼の名は、トム・ロックウェル。

彼は所属する部隊で唯一、ウェインと同様、軍人ではない志願兵であり、同じ部隊ということもあつたが魅力的な人柄に惹かれ、基地の中でも彼と過ごすようになつた。

ロックウェルが志願兵になつた理由は本当に馬鹿げていて、「人を殺してみたい」というのだ。普段の彼はゲーム会社で働き、画面の中で何度も人を殺しては吹き出る血の量や飛び散る体の様子を調整しゲームを作つていて。それでさらなるリアルを追求するため、人を殺せる戦場へ来たというのだから、相当な変わり者だと思つた。

だが、実際はどこにそのような狂気を秘めているのかという真面目な男で、彼のする話は面白く、知的でしっかりした意見を持つていた。よく考えれば、この部隊にいる限り、彼の期待する場面に遭遇することは到底なさそつだが、彼はそのことについては不満は言わなかつた。

「じゃあ3分の1だけもうよ」

ウェインはそう言つたが、彼は手にもつっていたチョコレートバーを半分に割り差し出した。

「遠慮するな」

彼はそう言い半分になつたチョコレートバーを一口で頬張り、味わい終えるとまた口を開いた。

「なあ、いつ終わると思う？」

それはこの戦争のことを指していた。ロックウェルと出合つてから、これまで何度も彼と戦争について話した。

そして、彼の語るそれはウェインの心に稻妻のような衝撃をもたらし、同時にウェインに自分の無知さを思い知らせた。

父に言われるまま戦地へ来たウェインは、ただ「えられた任務をこなせばいい」と思つていたし、戦争の意味など考えてはいなかつたのである。

ところがロックウェルによつて、この戦争が無意味であることや国の現状を教えられ、世間知らずだつたウェインは驚き、愕然としたのだ。

戦争がいつ終わるのか？ウェインは少し考えたが答えではない…

「……なら、ロックウェル、どうすれば戦争は終わると思う？」

ロックウェルは数回うなずいてから、自分の口に手を当てウェインの耳元に顔を寄せ、囁いた。

「戦争を始めた…奴、さえいなくなれば…」

ロックウェルがこう言つた瞬間だつた。

ドーンという衝撃音と共にトラックは大きく揺れ、急停止した。荷台の兵士達に緊張感が走る、ウェインも戦地に来て未だ味わつたことの無い胸の高鳴りを感じた。

ふとロックウェルの顔を見ると彼も強張つた表情でこちらを見ている。

「なんだらう？」

「わからない、けど、もしかすると、このトラックが狙われているかも知れない…」

ロックウェルがそう言つた時、数人の兵士が様子を見に外へ飛び出した。だが、まもなく銃声が数度聞こえたと思うと、トラックに向かつてくる数人の喚き声が聞こえた。

「まずい…・やはり襲撃されたんだ。ウェインお前は外にでるな

！」

そう言つと、ロックウェルは残つていた数人の兵士と共に外へ飛び出していつた。

自分だけ何もしないわけには…、そう思つたウェインは後を追つて外に出ようとした。

だが、そうしようと、立ち上がりかけたウェインの肩を、運転席にいた兵士がガツチリと掴み離そうとしなかつた。

「頼む！俺も行かせてくれ」

だが、肩にこもる力は変わらず、ウェインは立ち上がることができない。外では激しく銃声が鳴り響き、撃たれたのであるう人の呻き声が聞こえてきた。

ウェインは立ち上がるうと体に入れようとしながら、できない。そうしていると急に何も聞こえなくなった。しかしそだ誰も戻つてこない。

「様子を見ていきます」

ウェインの肩を押さえていた兵士が外へ飛び出した。
だが刹那、數度の銃声と共に、布で顔を覆つた武装集団の男が3人荷台へと乗り込んできた。

ウェインは最後の抵抗をする為、腰の銃を取り出そうとした。だが、さつきまで身に着けていた筈のそれは消えていた。

「さつさと殺してくれ」

そう言つて、目を瞑つた。

だが、彼は殺されず、田隠をさせられどこかへと連行された。

「よく帰ってきたな、我が息子ライアンよ」

戦地から戻ってきた息子を前にし、父は労いの言葉をかけた。

「何故、あんなことをしたんです？」

「何故だつて？お前のために決まつていいだろ。倒れていく仲間の敵を討ち、武装集団のリーダーを倒した男。お前は英雄として国民に迎えられる、それで国王の息子に恥じぬ男になるのだ。」

ウェインらを襲撃したのは父が組織した特殊部隊の兵士達だつた。

彼らは倒れた死体の中に、別の場所で捕らえた武装グループの死体を混ぜた。その中に指導者の死体もあつたのだろう。

そう、そんなことの為にロックウェルら味方部隊の兵士達が犠牲になつたのだ。

「僕は！そんな偽りの英雄になつたつて、うれしくもなんともない！」

「黙れ！無能が、誰のおかげでお前みたいのが生きていられると思つてゐるんだ！」

彼はそこで覚悟を決した。

「本当に国民が望む英雄、それはこうこうことでしょ……」

父と子、二人しかいない部屋に銃声が鳴り響いた。

銃声を聞き、部屋に人がなだれ込んできた、国王の従者達がウェインに銃を向ける。もしそれが、国王の息子でなかつた場合、従者達は即座に引き金を引いただろ。しかし、従者達は躊躇つた。

「本当に、あなたが国王を……」

「息子と一人きりに、と命令され、出て行つたのはあなた達ですう？」

が、その瞬間、別の誰かが部屋に入ってきた。ウェインはその顔を見て驚いた。

「あなたのやつたことは間違いじゃない」

そう言つたのはロックウェルだつた。

「聞け！全部終わつたんだ。そこに倒れている男、そいつが最後の犠牲者なんだ……」

ウェインに向けられていた銃口は静かに地面に向かい降りていった。

ロックウールの手紙（これは暗号化され恋人に送られたものである）

我々の暗殺計画が封殺され多くの仲間を失った今、

この国を救えるものは、もういなかかもしれない…

君に会えないのが苦痛だけど、僕は特殊部隊の任務でしばらく王子の警護することになった。

僕はそれに賭けてみようと思つ。

もしそれが失敗したら…

僕は自らの命を犠牲にしても国王を倒す…

だが、できることなら生まれ変わった僕らの国で君と幸せな生活を送りたいんだ…

（終）

(後書き)

7作目です。

今回はあるべくあらすじっぽくならないように、

気をつけて書いたんですが、結果は・・・

でも過去作よりはマシかな・・・

話はベターな話で、つくりも甘いですが、

まあひどくも無く良くも無い普通でしょう・・・

ウヒインってのは偽名で本名はライアンのですが話のカストもウ
ヒインのままな気がするのは気にしないでトドケー
ルugiが変とか「メント」していただけると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811f/>

無能

2010年10月28日07時41分発行